

平成 21 年 6 月 8 日現在

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2006～2008

課題番号：18320054

研究課題名（和文） 近代東アジアにおける異文化同化過程における翻訳の問題

研究課題名（英文） Problems of Translation and Cultural Assimilation in Modern East Asia

研究代表者 井上 健（Inoue Ken）  
 東京大学大学院総合文化研究科教授  
 30121867

研究成果の概要：近代東アジアにおいて異文化はいかに受容され、各文化圏の相互影響のもといかなる近代的諸概念や訳語を生み出していったのか。こうした問題意識に立脚して、まずは、近代日本における訳語の成立、近代的諸概念の成立に焦点をあて、調査、考察を試みた。近代日本の翻訳文学を戦前と戦後の連続と非連続の相においてとらえることによって、あるいは、日中、日韓の文化交流の諸相を具体的に辿ることによって、こうした視座の有効性が確認できた。

## 交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	5,200,000	1,560,000	6,760,000
2007年度	5,100,000	1,530,000	6,630,000
2008年度	4,900,000	1,470,000	6,370,000
年度			
年度			
総計	15,200,000	4,560,000	19,760,000

研究分野：比較文学、比較文化、翻訳研究

科研費の分科・細目：文学、各国文学・文学論

キーワード：比較文学、比較文化、翻訳、東アジア、学術概念

## 1. 研究開始当初の背景

西洋近代の用語や概念は、東アジア文化圏において、相当に複雑な、成立、伝搬のプロセスをたどる。17世紀から19世紀半ばにかけて、中国を訪れたキリスト教の宣教師などによって伝えられ、漢字に翻訳された西洋近代の語彙は、さらに日本に伝えられて、従来から存在した漢学系の語彙にまじって、蘭学や洋学の用語に転用、定着されていく。明治期に入ると、中国人留学生の増加と、日本の書籍の中国訳が盛んになることが、結果として、これら中国から流入した語彙の逆輸出を

促進することになる。こうした語彙の中には、韓国を経由したものも、韓国に伝えられて新たな展開を見せたものも当然含まれる。

このような日中韓の3つの国家、3つの言語の、相互交渉、相互影響の実相を、訳語、諸概念の成立に着目して、東アジア各国研究者の緊密な協力関係のもとに解明していく作業は、東アジア比較文学比較文化研究に大きな進展をもたらすものとなることが予想される。

## 2. 研究の目的

東アジアにおける近代の成立・展開をめぐる論議がしばしば空転しがちなのは、何よりも、1.「研究開始当初の背景」で述べたような、訳語・概念の成立事情に起因して、論者相互間で、歴史や文化を語る基本的用語概念が共有されていないからである。

本研究は、そうした歴史的展望に立ち、歴史や文化を語る基本的用語概念や訳語の再検討を、日本の比較文学比較文化研究の場から提案していくことを目指し、その基礎的作業を行わんとするものである。

本研究は、近代東アジアにおける異文化受容と近代成立の諸相を、その相互影響のプロセスに着目しつつ、まずは、近代日本における訳語の成立、近代的諸概念の成立に焦点をあて、調査、考察せんとするものである。

### 3. 研究の方法

東アジア近代の文学的営為を歴史的に展望するにあたって、いわゆる「ポスト・コロニアリズム」研究が提供した視座は今なお有効である。ただし、その種の研究が、日本対中国、日本対朝鮮半島といった、2国間、2文化圏間の対比の構図を強調するあまり、東アジア諸地域全般を横断的に俯瞰しうる立場を、いまだに獲得していないこともまた事実であると言わざるを得ない。

近代を形成した訳語、諸概念の成立過程に着目して、日中韓の3つの国家、3つの言語の、相互交渉、相互影響の実相を究明していく作業は、まさにそうした東アジア諸地域全般をカバーする包括的視野の確立を目指す上では、極めて有効なものである。

さらにこうした営為を、中国、台湾や韓国の比較文学研究の最新動向にも目配りしつつ推進していくことは、東アジア比較文学研究のモデルを提供することにもつながる。

長らく日米、日欧が中心であった我が国の比較文学比較文化研究に対して、東アジア文化圏という視点を対置することは、欧米中心主義を相対化し、「比較」という方法の硬直化を打開するのに有効に機能してきた。だが、同時に忘れてはならないのは、こうした第三の極を導入することによる相対化という方法それ自体も、硬直化し、ステレオタイプ化しやすい、という事実である。そうした陥穽を忌避するためには、欧米さらには中東文化圏の翻訳研究の最新の成果、とりわけ東アジア文化圏を考察の一方の対象とした学問的成果を、生産的に取り入れていくこともまた重要である。

訳語や概念の成立過程を考察するうえで避けて通れないのは、翻訳というプロセスの実相解明である。翻訳とは、狭義には、相異なる2言語間における変換行為として、広義には、意味の伝達と受容における変換・解読のプロセスとして定義される。翻訳を常にこ

の2つの相において捉えていくことは、翻訳なる営為を、人間のコミュニケーション行為、認識行為の根幹に積極的に位置付けていく道に通じる。本研究において、翻訳は常にこの二層の意味において捉えられるべきものとなる。

### 4. 研究成果

2006年度は、研究代表者である井上が、国際日本文化研究センターの共同研究「近代東アジアにおける知的空間の形成 日中学術概念史の比較研究」(代表者=孫江)および「出版と学芸ジャンルの編成と再編成

近世から近現代へ」(代表者=鈴木貞美)に参加、発表して、内外の研究者との連携を強化した。本研究の視野を広げるために、2006年11月に、東京大学駒場キャンパスにおいて、国際比較文学学会会長ドロシー・フィゲイラ氏ほかを招いて比較文学講演会「比較文学研究の最前線 南米・インド・日本」を開催した。研究分担者モートンは、2006年7月、南フランスのAlet-les-BainsのAcadémie du Midiのシンポジウムに参加、発表した。

2007年度は、研究代表者である井上が、国際日本文化研究センターの共同研究「東アジアにおける知的システムの近代的再編」(平成19年から平成20年、研究代表者=鈴木貞美)に参加し、欧米、東アジア、国内各分野の研究者と交流、討議し、研究テーマのさらなる深化を追求した。2007年11月には、研究分担者モートンが第17回ニュージーランド国際学会に出席し、発表した。同10月には、研究分担者劉岸偉が近代東福岡ユネスコ協会創立60周年記念国際文化セミナーで、近代日本の知識人の心的構造について、比較文学比較文化の視点から分析する講演を行った。代表者および分担者は適宜会合をもって、議論を重ね、テーマの掘り下げに努めた。

2008年度は、研究成果の一端を世に問うものとして、2つのシンポジウムを開催した。まず第一は、代表者である井上が、組織し、司会を務めた、日本比較文学学会60周年記念第46回東京大会(清泉女子大学、2008年10月)のシンポジウム「戦後文学の連続と非連続:1950年代の海外文学との関係を中心に」である。このシンポジウムは、井上が編者を務めた『比較文学研究』第91号(東大比較文学学会、平成20年6月)の《戦後日本文学》特集と連動して、本研究の成果を発信する場として企画されたものである。これらにおいて井上は研究分担者と議論を重ねつつ、翻訳出版点数はほぼ倍増したこの時期に、戦争で中断を余儀なくされた欧米文学熱が再燃し、大規模な世界文学全集が刊行され始めたこと、それら世界文学全集には、1920年代半

ばから 1930 年代に訳出されていた「世界文学」(同時代文学にしてモダニズム文学の記念碑的作品)が相当数含まれていた事実にもまず着目した。大正期・昭和初期に、観念的、ユートピア的に語られた「世界文学」が、東洋の視座からするその「近代主義」的限界への捉え返しも含めて、現実的なものとして、あらためて浮上してきたのである。翻訳文学における異文化同化のプロセスを、戦前と戦後の連続と非連続の相においてとらえ、それを東アジア文化圏に広げていく視座の有効性が確認できたという点で有効な試みであった。

2008 年度に行われた、もう一つの重要な成果発表の試みは、研究分担者である菅原が中心になって企画し、司会を務めた、シンポジウム「金素雲生誕百周年記念シンポジウム《金素雲を今いかに語るか》」(東京大学駒場キャンパス、平成 20 年 10 月)である。

以上のような研究発表や研究打合せ、さらには、下記の発表論文などを通じて明らかになったのは、東アジア文化圏における、西洋近代の用語や概念の成立過程は、日中韓の三国、三言語文化圏の相互交渉、相互影響が深く関わってくるがゆえに、ことのほか錯綜としたものであるという事実である。中国を訪れたキリスト教の宣教師によって伝えられ、漢字に翻訳された西洋近代の語彙が、日本に伝えられて、従来から存在した漢学系の語彙にまじって、蘭学や洋学の用語に転用・定着され、さらには中国に逆輸出されていった過程一つをとってみても、その実態を解明していくためには、比較文学比較文化研究の方法を駆使しつつ、東アジア各国研究者の緊密な協力関係の下に、長期的な視野に立って、作業を進めていく必要がある。その一方で、明治期日本における学術概念・用語の成立過程の、さらなる綿密な調査と分析が必要なことは言うまでもない。

研究代表者である井上は、この 3 年間、共同研究作業を推進し、まとめ役を務めるとともに、19 世紀アメリカの作家 Edgar Allan Poe の受容や、戦後日本の翻訳文学・翻訳文化を中心に研究を進めてきた。この成果を、研究分担者劉が試みているような、東アジアに基軸を据えた異文化交渉過程の研究と、それをさらにアキゾチシズムを視座として巨視的視野のもとに展開しようとする研究分担者モートンの研究と、さらには、翻訳や学術概念の成立の問題を、クロスジャンルの展開している研究分担者今橋の研究活動などと、有機的に連関させて、更なる展開を図っていくことが今後の課題である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 8 件)

1. モートン、リース「与謝野晶子の『みだれ髪』と鉄幹の『紫』のモダニズム」、言語文化論叢、第 14 巻、45 - 62 頁、2009、無
2. 井上健「ポー受容の 120 年：影響研究の一事例として」、大手前比較文化学会会報、第 10 号、3 - 11 頁、2009、無
3. モートン、リース「戦争詩論」、『比較文学研究』、第 91 巻、43 - 63 頁、2008、無
4. 劉岸偉「日中の近代交流と留学生」、財団法人入管協会編『国際人流』、第 244 号、20 - 23 頁、2007、無
5. 劉岸偉「周作人伝(3)」、言語文化論叢、第 11 巻、1 - 22 頁、2007、無
6. 井上健「文芸批評とパースペクティブ」、ヘルマン・ゴチェフスキ編『知の遠近法』(講談社選書メチエ) 207 - 225 頁、2007、無
7. SUGAWARA Katsuya, "Thinker in Color: Lafcadio Hearn's Color-ful Descriptions of La Martinique and Yokohama", Poetica, Vol. 65, pp. 17-30, 2006, 無
8. 井上健「作家 = 翻訳家村上春樹の出発 1979 - 1982」、『英語青年』、第 152 巻第 5 号、10 - 12 頁、2006、無

〔学会発表〕(計 7 件)

1. 井上健「ポー受容の 120 年：Edgar Allan Poe と日本近代文学」、2008 年 11 月 25 日、第 11 回大手前比較文化学会、大手前大学
2. 井上健、大嶋仁、山田潤治、曾根博義、シンポジウム「昭和文学の連続と非連続：1950 年代の海外文学との関係を中心に」、日本比較文学学会第 46 回東京大会、2008 年 10 月 18 日、清泉女子大学
3. 井上健、戸川安宣「ミステリーと翻訳の戦後を考える」、日本比較文学学会東京支部 8 月例会、2008 年 8 月 16 日、日本大学法学部
4. 佐藤伸宏、井上健、江島宏隆、山本昭彦、シンポジウム「比較文学研究の射程」、日本比較文学学会東北支部第 5 回比較文学研究会、2008 年 7 月 28 日、仙台市青年文化センター
5. 井上健、巽孝之、宮川雅、大串尚代、河野智子、ワークショップ「"Tarr and Fether" あるいは Tar and Feather ポーを多文化戦略で読む」、2007 年 10 月 14 日、日本アメリカ文学学会第 46 回全国大会、広島経済大学
6. 井桁貞義、井上健、柳富子、沼野恭子、高橋秀太郎、ワークショップ「チーフの短篇小説はどう読まれてきたか」、日本比較文学学会第 59 回全国大会、2007 年 6 月 16 日、北海道大学
7. 劉岸偉「エクソフォニーの境地を問う 外国語で書くことの意味を考える」、国際日本文化研究センター外国人研究者シンポジ

ウム、2007年1月12日 13日、国際日本文化研究センター

〔図書〕(計4件)

1. Leith Morton, *The Alien Within: Representations of the Exotic in Twentieth-Century Japanese Literature*, University of Hawaii Press, 2009, p.258
2. 今橋映子『フォト・リテラシー：報道写真と読む倫理』、中央公論社、2008、256頁
3. 今橋映子『ブラッサイ：パリの越境者』、白水社、2007、407頁
4. モートン、リース『与謝野晶子の「みだれ髪」を英語で味わう』、中経出版、2007、224頁

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

井上 健 (Inoue Ken)  
東京大学大学院総合文化研究科教授  
30121867

### (2) 研究分担者

菅原 克也  
東京大学大学院総合文化研究科教授

30171135

杉田 英明

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

90179143

今橋 映子

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

20250996

モートン リース

東京工業大学・外国語研究教育センター・教授

40361787

劉 岸偉

東京工業大学・外国語研究教育センター・教授

30230874

(3) 連携研究者